

Luncheon Linguistics, 28 November, 2018

2018 (平成 30) 年 11 月 28 日

「ルシヤン語 (タジキスタン) における az 対格の定義の問題点 – 「言う」と「尋ねる」を中心に」
発表者：岩崎崇雅 (京都大学大学院文学研究科修士課程)

ルシヤン語 (タジキスタン) には過去時制で二重斜格型のアラインメントをもつが、特に若い世代では主格対格型のアラインメントに移行しつつある。この変化に加えて、前置詞 az ‘from’ を対格のマーカースとして取るという構文も現れている。(これを本発表では az 対格と呼んだ)

本発表では Wendtland (2008) が az 対格の例として挙げた *luvďow* 「言う」と *pawstow* 「尋ねる」は az 対格の機能を持っていないということを議論した。具体的には、*luvďow* で az なしで直接 P を取る例では、その P は必ず直接目的語として機能している。これに対して、az 対格とされている文は与格の用法としてしか使われていないことを指摘した。また、この与格の標識には後置詞 *=rd* も使われるが、実際の使用例から、az は物語の時に用いられ、*=rd* は日常会話で用いられていることが予想された。*pawstow* に関しては *luvďow* のような直接 P をとる文も前置詞 az を取る文もどちらも与格としての用法で使われているため、またタジキスタンの公用語であるタジク語のカルクの可能性があるため、az 対格と認定することは困難であることを指摘した。